



(撮影：Bjorn Abelin)

2018年度 | 公募研究 I

「モーション・クオリア」研究 ～自由落下による必然的な動き と表現～

研究代表者：関 典子（舞踊家）

A1：

2014年12月に初めて出会った「モーション・クオリア」（考案者：工藤聡：在スウェーデン）。なにものかによって動かされているかのように不安定に揺らぎ続ける様に、思わず手を差し伸べたくなるような、肉体的／本能的な反応を呼び起こされた。それは筆者にとって不可思議な体験でもあった。なぜこんな風に動くのか。それまで経験したことも観たこともない表現に惹かれ、その根幹にあるものを探りたいと感じた。ダンサーとしての挑戦欲求、そして、自身のこれまでの研究テーマであった重力への関心とも合致し、舞踊学・宇宙物理学・振付家・ダンサーなどの多分野での共同研究プロジェクトへの応募に至った。

A2：

2019年2月3日、春秋座での「劇場実験」では、【1. パフォーマンス】での『Necessitudo』上演、【2. レクチャー・デモンストレーション】での研究発表、来場者を対象とする【3. ワークショップ】、そして【4. パネルトーク・質疑応答】という4時間余りのプログラムを通して、筆者が初めてモーション・クオリアを目にした際の衝撃を動機とする本研究のプロセスを追体験していただくことを意図し、実現した。

特に舞台上での参加型ワークショップでは、作品上演や研究発表では伝えきれない、いわゆる言い難い繊細かつ微妙な感覚を、身をもって体感・目撃していただくことができた。質疑応答での貴重なコメントなど、来場者の皆様はもはや「観客」ではなく「研究協力者／実験の立会人」のような存在であり、こうした関係性の共有・構築は、「劇場実験」だからこそ実現できた。

A3：

完成した作品の披露だけではなく、来場者と共にプロセスを共有し、思考する場を設けられたことが有意義だった。考案者の工藤聡氏やダンサーのクレア・カムース氏が活躍するヨーロッパでは、観客第一の公演ではなく、創作・研究に対する助成が充実しているという。「リサーチの上に成り立つ作品」という在り方を共有できたことが新鮮であった。この「劇場実験」の公募は、日本では稀有であり魅力的なシステムだと実感している。

A4：

これまでもダンサー／大学教員として、実技と理論の両面からダンスに向き合ってきたが、個々の活動は根幹では繋がり相互にフィードバックしていたものの、真っ向から取り組んだことはなかった。本プロジェクトでは、ダンサー／被験者としてモーション・クオリアという未知の世界に飛び込み、何が起きるのかを研究者として観察・考察する……いわば、自分自身を被験者に、人体実験を行うようなことを試みた。共同研究チームの皆様がこの挑戦を全力でサポートしてくださり、その後も続くネットワークを構築できたことが、大きな変化であり成果であったと感謝している。



2019年度 | テーマ研究Ⅱ

『4』上演の可能性を巡る劇場実験

研究代表者：川村毅（劇作家・演出家）

A1：

稽古場では調達不可能の機材を使用し、限りなく本公演に近いスペースで机上のアイデアを実践することができた。客席までも設置し、現実に観客を入れることによってリアリティのある、本公演を想定した実験が可能となった。

A2：

観客の満足度を気にすることなく、どう感じたか、どう思ったかを純粹にリサーチできる。

無観客でもいいという柔軟さもある。

公演の際の時間的制約をさほど気にすることなく、端的に言えば、いい意味で緩く、切羽詰まらずに準備ができる。

成功か失敗かを気にする必要がない。

A3：

実際のことを例に挙げると、本実験で使用したマルチメディアの方法を、実験後、全放棄した。劇の構成上、マルチメディアは相応しくない、この方法に取り組むには、方法をあらかじめ前提としたダイアローグを創作しなければと判断した。そうした判断が本公演前に身をもって確認できるということに、この実験の有効性、価値、醍醐味がある。



2019年度 | 公募研究Ⅱ

The Waiting Grounds—— 舞台芸術と劇場の現在を巡る領域横断的試み

研究代表者：中山佐代（舞台企画制作）

A1：

フリーランスの企画制作も応募できる開かれた枠組みであること。領域横断的な取り組みを行うことができ、またそれが評価されること。劇場スタッフのサポートが得られること。

A2：

舞台芸術のために設えられた劇場で、現代アーティストの田村友一郎氏とクリエーションを行うことは、見慣れているがゆえに見落としていた劇場環境を再発見する機会になりました。それは劇場という構造、制度や慣習についてです。公演を実施する現行のシステムは歴史の中で最適化されてきたはずですが、それを見直し再考する最初の手がかりと課題を得たと思います。

例えば、構造についてですが、田村氏と劇場見学に訪れた際、客席は春秋座の2階正面席のみを使用することが決まりました。それは劇場空間を全て使う（使わない部分をないものにしない）ということの意味しているように感じました。また、劇場のロケハンとして様々な機構（盆、セリ、オーケストラピットなど）を確認する日を設けました。その場所をよく見る・知ることから始めることは当たり前かもしれませんが、省略されてしまいがちでもあります。それは贅沢で有意義な時間でした。

A3：

〈劇場実験〉という言葉が「公演のための実験」ではなく、「実験的な公演」であると同時に「劇場を実験する研究」として捉え、本プロジェクトを実施しました。〈劇場実験〉という言葉のおかげで両軸の思考が促されました。

A4：

それぞれの環境を土台に企画を立ち上げ、成長させて行くことを手放さないようにしたいと改めて思っています。



撮影：前谷開

2017 年度 | 公募研究 I

老いを巡るダンスドラマトウルギー 「イヴォンヌ・レイナーを巡るパ フォーマティヴ・エキシビジョン」

研究代表者：中島那奈子（ダンス研
究、ダンスドラマトウルク）

A1：

これまであまり紹介されてこなかった、ポストモダンダンスの振付家イヴォンヌ・レイナーさんの作品を日本で上演し、そのことで、ポストモダンダンスの日本での再考を進めたい、と考えたためです。また、近年レイナーさんは「老い」のテーマをダンスで探究しており、それを私自身の「老いと踊り」という研究と、実践を通して結びつけたかったためです。

A2：

これまでのイヴォンヌ・レイナーさんについての研究をもとに、春秋座を、五日間にわたって開放する「パフォーマンス・エキシビジョン」という形を考案しました。レイナーさんのアーカイブ資料を米国から取り寄せて客席内に展示し、本舞台には初期の代表作「心は筋肉である」の装置を再現しました。加えて、期間中には同じ舞台上、レイナーさんの映像作品上映や、関連レクチャーを行い、レイナーさんの代表作「Trio A」と「チェアピロー」を、パフォーマンスとして展示しました。これは現在、多くの振付家が試みている、ダンスのアーカイブ化やダンスの美術館化の流れをひっくり返すもので、春秋座という劇場の美術館化であったと考えています。また結果として、「Trio A」を初めて日本で上演することにもなりました。

A3：

実験は、通常の劇場公演としては成立しにくい、リスクが伴うアイデアを可能にしたと思います。ことに、「Trio A」の上演には、二十代から八十代まで、さまざまな分野の芸術家に集まってもらったため、レイナーさん側との衝突もありました。レイナーさんの作品は日本での知名度はあまり高くなく、テーマも政治的なもので、観客動員はそれほど見込めないでしょう。また、劇場をダンスの美術館として使う発想は、通常の劇場使用とも大きく異なり、一般向けの企画としては時期尚早かもしれません。ただ裏を返せば、劇場での作品創作の目的は、観客動員数や短期的成果だけではないはずで、リスクを伴うさまざまな「実験」を通してこそ、劇場の新しい使い方が見つかると、長期的には劇場文化の豊かな発展につながるように思います。

A4：

実験を組み立てる過程で、舞台にアーカイブ資料をおくと小道具になってしまうなど、現場での気づきが多く、それが研究にも跳ね返ってきました。また、劇場実験を経て、レイナーさんとの関係が、より直接的で有意義なものになりました。劇場実験後に、レイナーさんとの対談で、リハーサルは足りていないものの、この春秋座での上演が、これまでの「Trio A Facing」の中で、もっとも素晴らしいものだと言ってくれました。また、参加してくれた喜多流能楽師の高林白牛口二さんとの出会いは、「老いと踊り」というテーマに直結し、彼との対談（<http://www.nanakonakajima.com/rainer/?p=254>）を含めて、大きな影響を受けたと感じています。